園長先生の子育てひろば

令和４年２月

超巨大児

園長　山中　文

私事ですが、息子が 2 人います。

1 人目の生まれ月がちょうど 2 月でした。予定日より 10 日遅れで生まれたこともあってか、4104 グラムありました。大きな子どもだと聞いていたとおり、本当にぷるんぷるんした子どもが出てきました。49 時間 5 分と長い長い分娩時間のあと、部屋に戻ると、小雪が舞っていてほっとしたことを覚えています。

そのような感傷は、母子手帳で「巨大児」というスタンプに驚いたあたりから吹っ飛びました。息子は、大きくて扱いやすいと思われたのか、病院内の母親教室の沐浴指導では赤ちゃんモデルに起用されましたが、看護師さんが息子をバスタオルにくるもうとしても大きすぎてくるみきれず、また頭を抱えるにも重く、笑い話のようなことになってしまいました。一事が万事そんな感じです。重さの話題がとぎれない新生児期になりました。

次の子の時、1 人目より大きくなると聞いて、覚悟はしておりました。やはり、そのとおり。今度は 3 日遅れくらいでしたが、4626 グラムありました。大きすぎたのと、へその緒が首にからまったこととで、生まれてすぐ保育器に入りました。新生児室に見にいくと、「あんな大きい子が保育器に入ってる。なぜなんだろうね」という見舞客の方々の声が聞こえ、もじもじしたことでした。確かに保育器いっぱいの体でした。少し経って 1 ヶ月健診に行くと、「半年健診はあちらです」と言われました。1 ヶ月後には 6000 グラムをとっくに超えていましたから、無理もありません。グァムで何歳かと聞かれ、“3 months old”と答えて ” Oh! Big baby!” と驚かれた時は、この国のサイズをもってしてもかと思ったことです。何もかもが大きく、上の子の時からとっておいたファーストシューズはもちろんサイズが足りませんでした。

意外にも、この子の時は、「巨大児」のスタンプは押されませんでした。もうそのような記載はなくなったと聞いて、ちょっとおかしいやらほっとするやらでした。でも、ふとしたことでネットを検索しましたら、4500 グラムを超えた子どもは「超巨大児」と呼ばれるという記載を見ました。「巨大児」の上があったのですね。

転がしておいても大丈夫といわれて育ち、発熱して救急外来に連れていったら、担当が小児科医師ではないので乳児に注射ができない、でもこれだけ大きいから大丈夫といわれて帰され、そのまま肺炎になって慌てたこともあります。

もう遠い昔のことなのに、いまだに鮮明に覚えているのですから、親子という新しい関係

がつくられていく時というのは人にとってすごいものなのだなあと思います。お子さまがお誕生の頃というのは、軽いお産にも重いお産にもそれぞれに大きなドラマがあることでしょう。小さい赤ちゃんのお産にはまた違うご苦労やご心配が大きかったことと思います。

本園の子どもたちを見ていると、そんな時からまだ数年しか経っていないのに、今度は自立に向けて成長していっていることがわかります。去年の春からの 1 年を振り返っても、少しずつ違ってくる変化を実感したり、ある日突然できるようになったことに喜んだ日を思い出したりと、いろんな形の成長が見つかります。もうすぐ年度末がきます。1 年のお子さまの成長をぜひ見つけて話題にしてあげてください。